論文審査結果の要旨

本論文について、2023年8月17日13時から15時15分にわたり、京都府立大学文学部会議室において公開審査会を実施した。最初に概要の発表があり、その後、審査委員による質疑がおこなわれた。以下に本論文の研究上の達成と、質疑のおもな内容を記す。

研究上の達成

従来の研究では、交通支配の中心としての江戸幕府道中奉行について、一方実地でその任務にたずさわる宿駅と助郷村について研究されてきたが、本論文ではその間に位置し宿駅を領知として宛がわれた個別領主の役割に注目して、幕府、個別領主、宿駅・助郷村の三者の関係性を実証的に解明した功績は大きい。具体的には、1980年代に発展した国家論、町・村を中心とした共同体論を踏まえつつ、近年明らかにされている全国各地の大名・旗本などの個別領主の役割を再評価して幕藩体制が有する集権的性格と分権的性格の相互関連性を解明する研究視角・性格を組み込んで、近世宿駅の支配構造の特質を解明したことは高く評価できる。さらに、日本近世の転換期・分水嶺と考えられている宝暦―天明期について交通史の観点から重要な問題提起を行い、日本近世史研究全体にも影響を与える成果となっている。宿駅支配の全体像を解明するうえでは抜け落ちている重要な論点もあるが、近江国の在地史料を博捜し丹念に読み込むことで、新たな日本近世交通史研究の地平を切り拓いた。

審査会でのおもな質疑

① 序章での先行研究のまとめ方および本研究の位置づけ方に問題がある。1980年代に発展した国家論的観点からの日本近世交通史研究が2000年代にほとんど見られなくなるとまとめているが、個別の論点が深まり進化している部分もあり、本研究もその流れの中にあるのではないか。

② 宝暦―明和期という18世紀半ばに大きな画期があるとするが、何故この時期に画期があるのか。また序章においてもこの時期を念頭に置いて研究史整理や課題設定を行うべきではないか。

③ 「村」と「宿」との関係について不明瞭である。史料の差出・宛名でも「庄屋」「年寄」「問屋」などが併記されている。「柏原村」の中にある「柏原宿」について、両者はどういう関係にあったのか。

④ ③に関わって、「村方騒動」や「宿役人」という用語が、本研究では多用されているが、適切な定義・使用方法なのか。

⑤ 18世紀半ばの宝暦・明和年間の分析から、幕末の元治年間までの正確な歴史的変遷が不明瞭である。特に天明・寛政年間にも大きな変化があったと幕末期の史料には記述されているが、当時の一次史料には記述がないのか。

⑥ ⑤に関わって、第5章の分析は19世紀前半であるが、宿駅ではなく助郷役であり、位置づけ方などに工夫が必要ではないか。

⑦　幕藩体制の転換期とされる宝暦―天明期を象徴する事件として、関東で発生した明和の伝馬騒動があるが、本研究が注目する時期と同じであり、共通性などはないのか。中山道の交通量増大、これに対する道中奉行の政策など軽視できないのではないか。

以上の質疑に対して次のような応答があった。①については、指摘の通りであり今一度、本研究の位置づけについて考えたい。②、⑦については、今のところ全国的な動向との直接的な因果関係は分かっていないため、伝馬騒動との関連性・共通性は考えていない。実証的に研究を行った結果に出た結論であり、その背景や原因については今後の課題としたい。③、④については、残された史料が宿駅関係のものがほとんどであるため、村との関係についてはほとんど解明できなかった。新出史料の博捜を含めて今後の課題としたい。⑤、⑥については、当時の一次史料では確認できず、今後は柏原宿以外の宿駅も対象に広げていくことで解明したい。

質疑応答を通じて、本論文の意図するところ、さらに考察すべき問題、今後取り組むべき課題が明確になった。最新の日本近世史研究の成果を踏まえながら、近江国の宿駅・助郷村から江戸幕府の交通政策・制度全体までを具体的に解明したことは、今後の日本近世交通史研究に大きく寄与するものである。また、地域に残された史料を丹念に読み込んで立論している実証性、宿駅・藩・幕府の三者の関係に注目して日本近世陸上交通の特質を論じた視角の斬新性は高く評価できる。よって、本委員会は、本論文が博士（歴史学）の学位授与の評価基準を満たしていると判断し、博士（歴史学）の学位を授与するに値するものと認める。